

たのしい たのしい 船穂校 ♪

倉敷市立船穂小学校

綿花で紡ぐ倉敷物語 その②

旧倉敷は江戸時代は幕府直轄の天領でした。実石高十萬石以上の備中地区の天領を倉敷代官所が統治していました。テレビドラマなどで悪代官と御用商人が出てきますが、あのような話は外様大名の飛び地の代官には例があっても、天領の代官には例がありません。天領の代官は、旗本衆から選ばれますが、彼らは優秀な官僚で、近隣の外様大名の手本となるような統治をしました。倉敷は商人の合議制で自治が行われ、武士階級は代官所のほんの一握りの人しかいませんでした。そうしたゆるやかな統治の中、倉敷の町は備中地区の諸大名の物資の集散地として繁栄しました。

そして、有力な商人の資本によって、吉備の穴海の干拓が江戸時代に進められました。織豊政権の時代には、早島と帯江を結ぶ宇喜多堤が築かれていましたので、江戸時代初めには、万寿、浜、中庄、庄付近は農地となっており、江戸時代の干拓は、帯江、豊洲、茶屋町地区で行われました。ただ、農地はでき上がっても土壌には塩分が含まれていて、米や麦を作付することはできません。多くの作物が塩分を嫌いますが、綿花とい草はある程度塩分があっても成長します。広大な干拓地に綿花とい草が栽培されました。住居の一部に畳が用いられたり日常の衣服として木綿を着るようになったりと、人々の暮らしが向上するのにあわせて、綿花やい草は莫大な利益を生むことになりました。

豪商の屋敷や蔵や店舗が立ち並び、倉敷の街並みが形成されました。明治・大正期になると、今までの白壁屋敷に加えて紡績工場や銀行や美術館などの洋風な建物が建てられました。現在の美観地区は江戸時代の街並みに近代の建物がとけ込み、他の街では味わえない風情のあるものになっています。

先日、家内と美観地区に行きました。市立美術館の市営駐車場に車を止め、美観地区入口の信号から美観地区の通りに入りました。店先に『はちみつアイス』ののぼりがあり、すごく甘いんだろうなあと思っていると、家内が「食べたい。」と言います。「まあ、少し歩いてからにしよう。」と話を曖昧にして歩き始めました。大原美術館の前を過ぎ中橋のところを右にとって高砂橋まで柳並木を歩きました。外国人の観光客、特にアジアの国の方が以前よりずいぶん増えたように思います。アジアの人たちには、倉敷の街はどのように映るんだろうと思いながら歩きました。桃太郎のからくり博物館の通りを進み、本町通りに出ました。旅館や焼き鳥やなどの居酒屋が立ち並んでいます。以前よりもずいぶんきれいに整備されています。雑貨屋で孫のみやげの紙風船を買ってから東町まで歩きました。羽島交差点の近くまで整備されています。青陵高校の生徒が市民会館に観劇か音楽鑑賞に行く列に出くわしました。誘導の先生の「ご迷惑をおかけします。」との言葉もとても心地良かったです。街が作り上げた空気のように思えました。もと来た道を引き返し本通り商店街脇の路地をぬけ、件の『はちみつアイス』の店に戻りました。縁台に座って『はちみつアイス』を食べました。歩いた疲れも手伝ってか、適度な甘さで、はちみつの風味がとても美味しかったです。いい街だなあ。いい街になったなあと思いました。

子どもたちが成長し、東京や大阪の都会で出身地をたずねられ、「倉敷です。」と答えれば、きっと相手は、「白壁の街の倉敷ですね。美観地区はいいですよ。」と言うでしょう。それに対して、「いえぼくは倉敷と言っても船穂なんで…」ではさびしいですよ。「あの美観地区は…」と胸をはって答えてほしいとは思いませんか。『綿花から始まる倉敷物語』は、倉敷市の子どもたち全員が、胸をはって「わたしの出身地は倉敷です。」と答えてほしいとの思いで綴られているようにも思えます。